

なにを埋めるの？



作／あさのあじこ



絵／ひろゆい

机の上でこぶしを握る。

お腹の下あたりに力を込めて、前を向く。後ろ頭が見えた。背中も見えた。

押丸おしまるけんじ研吾くんの背中だ。六年生の男の子にしては小さいなと思う。でも髪の毛はきれい。ちょっと長めで耳を半分ぐらい隠している髪は、とてもツヤがあつてさらさらしている。わたしはショートカットだけれど、くせ毛のせいかな。やたらピンピンはねるのだ。あんなにツヤツヤもしていない。どんなシャンプーを使っているのだろう。聞いてみたい。

いや、今はシャンプーなんてどうでもいいのだ。つい、どうでもいいことを考えてしまうのは、わたしの悪い癖だ。反省。

そう、シャンプーどころじゃない。あの穴のことを考えたら、髪の毛という髪の毛がみんな抜けてしまうみたいに感じる。ほんとに、ほんとにシャンプーどころではないのだ。

神頭かみがしら小学校六年二組の教室は、ざわついている。放課後のざわつきだ。一日の授業が終わって、どことなく緩んだ空気が漂っていった。

押丸くんが立ち上がる。昔風の黒一色のランドセルを背負う。

あつ、押丸くん、帰っちゃう。
わたしも慌てて、席を立った。

押丸くんが振り向く。そして、わたしに向かつて歩いてきた。机と机の細い隙間をイスにも机にも当たらず、すー